

# 南相馬市おだかくかんじょううち小高区おだかくかんじょううち歓請内古墳第4、5次調査の概要

第4次調査期間 2009年3月2日～3月21日

第5次調査期間 2009年8月3日～8月25日

辻 秀人・伊東静香・阿部良祐・佐久間美里・佐竹 崇・佐藤貴裕・佐藤泉英  
鈴木麻衣・成瀬裕也・楡 望美・山口貴晃・山本秀美・遊佐恵太

## I. はじめに

本学文学部歴史学科辻ゼミナールは東北地方の古墳時代の様相を把握することを目的として、主に宮城県と福島県の古墳の発掘調査をおこなってきた。近年は福島県南相馬市の古墳の発掘調査を中心におこなっており、2007年7月から南相馬市小高区歓請内古墳の発掘調査を継続している。これまで歓請内古墳の発掘調査の成果を順次報告をしてきたが(辻秀人他 2008、2009)、ここでは2009年3月におこなった第4次調査と2009年7、8月におこなった第5次調査の成果を報告する。

なお、第4、5次調査の報告に先立ち、これまでの調査の成果を「南相馬市小高区歓請内古墳第2、3次調査の概要」(辻秀人他 2009)から一部再録する形で簡単に記した。

### 【古墳の立地】(第1図)

歓請内古墳は福島県南相馬市小高区字歓請内に所在する。阿武隈山地からのびる丘陵の東端、太平洋に面する平野を一望する位置に築かれている。古墳の西側には広大な畑が広がり、歓請内地区の集落は古墳のある丘陵の下に広がる。

### 【古墳の規模と現状】(第2図)

古墳の測量調査から次のことが確認された。

- ・ 墳丘は長軸約30m、短軸約25m、高さ約5mを測り、墳頂平坦面ほぼ10m×10m、小高地区では大型の方墳である。
- ・ 墳丘南側の裾には祠があり、祠造成に伴い、墳丘南斜面は大きく削られている。
- ・ 墳丘南東隅は、崖によって一部失われている。
- ・ 墳丘南西隅は土塁状の高まりが取り付いている。後世のものと思われる。
- ・ 古墳は丘陵末端の東側に向けて傾斜する場所に築かれているため、古墳周囲との比高は西側で約3.5m、東側で約5mを測る。傾斜地に古墳が築かれる場合、墳頂平坦面を水平に築くためには当然このような比高差を持つことになるが、結果として東側の平野から見上げた場合、墳丘はより大きく見える。古墳築造当初からこのような見え方を意図した可能性が高い。

### 【調査区】

これまでに墳丘斜面東側に第1トレンチ、西側に第3トレンチ、北側に第2トレンチ、墳頂平坦面に第4トレンチを設定し、調査をおこなってきた。ここでは第2、4トレンチ

の調査成果について記す。第1、3トレンチについては過去の報告（辻他 2008、2009）を参照いただきたい。

#### ・第2トレンチ

古墳北側の墳丘斜面の形状とテラスの有無の確認を目的として、主軸上にトレンチ西壁をあわせ設定した。

調査の結果、墳頂平坦面の変換線と墳丘斜面を確認した。墳頂平坦面の変換線は標高28.8 m付近で見られ、その変換線から、傾斜角約20度の墳丘斜面が始まる。しかし、調査区の下部、高さ27.0 m付近では古墳築造以降の掘り込みがみられたため、墳丘の全景は明らかにできなかった。また、その掘り込みにより墳丘断面が露出したため、積土(LⅢ)の層序を観察することができた。積土は下層に粘土質の土、上層に礫混じりの白色の土が積まれていることが判明した。積土の下には黒色土が広がり、弥生土器片が出土した。この土層は旧表土(LⅤ)とみられる。さらにその下層は地山(LⅥ)であることが判明した。

第3次調査では墳端部分と周濠の有無が確認できなかったため、第4次調査の課題となった。

#### ・第4トレンチ

埋葬部を調査するために古墳墳頂部に設定した。古墳主軸に沿った土層観察を行うため、50cm幅の畔を残した上で、北側をA区、南側をB区とした。

第1次調査では調査区内の表土を除去した。すると、墳丘外周に近づくにつれて黒色土の層厚が増していった。これは、墳頂平坦面西寄りにある石碑の関係で周囲は削られ、排出した土が周囲に積まれたためとみられる。さらに掘り進めるとA、B区ともに中央部付近から方形の高まりがみられ、さらに調査区の西寄りに陥没坑と思われる土質の違いを確認した。第2次調査において方形の高まりを掘り進めると、陥没坑と思われるプランがはっきりとしてきたため、その高まりは古墳築造以後のものであると判断された。さらに、大変硬く、上面からロクロ土師器が多く出土することから、おそらく建造物の基壇的な遺構ではないかこの時点では考えた。その後陥没坑・墓壙を確認するため、基壇的な遺構にL字の断ち割りをいれたところ、A・B区にまたがる墓壙と思われる土質の違いと中央部に陥没坑と思われる土質の違いを検出した。

第3次調査では基壇と思われる高まりを全て除去し、精査したところA、B区ともに土質の違いから墓壙を確定した。また、これによって基壇と思われていた方形の高まりは墓壙内の土質の違いにより見えていたものだということが調査区の各土層断面から判明した。墓壙は一辺が約5mの方形をしているが、西側の辺は不明である。また墓壙の形状は墳丘平坦面の形状に沿っておらず、古墳主軸に対して傾いて設定されていることが確認された。さらに、A区西側とB区北西に陥没坑と思われる土質の違いを確認することができた。陥没坑は長さ約3.2m、幅は不明である。古墳主軸に対して、向きは真北方向から真東方向に40度傾いており、方形を呈している。おそらく、陥没坑の底面には木棺が埋

納されていた可能性が高いと思われる。

埋葬部の様子を明らかにするため今後も調査を継続する。

#### 【主な出土遺物】

これまでの調査において様々な遺物が出土したが、その内古墳に伴うものと思われるものに関して簡単に記した。

##### ・二重口縁壺型土器

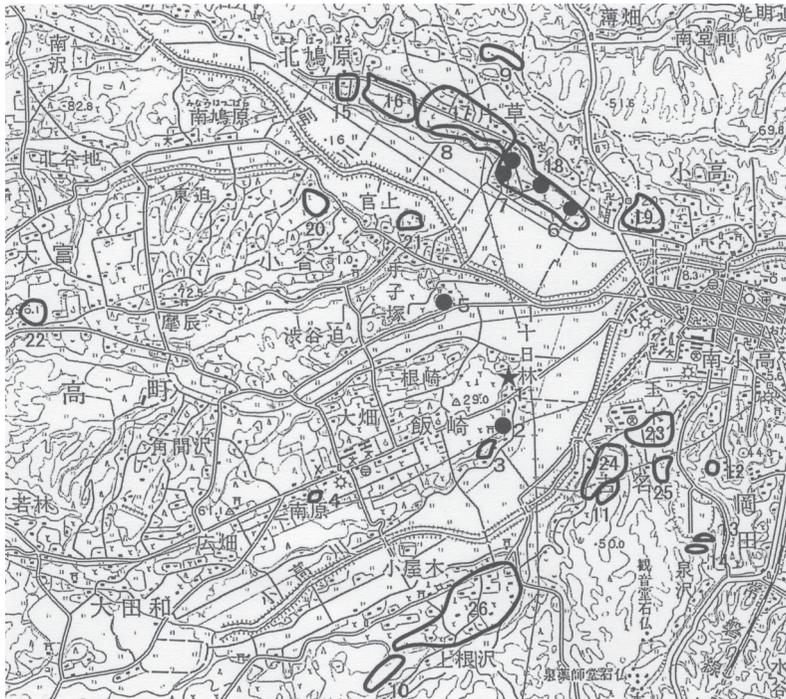
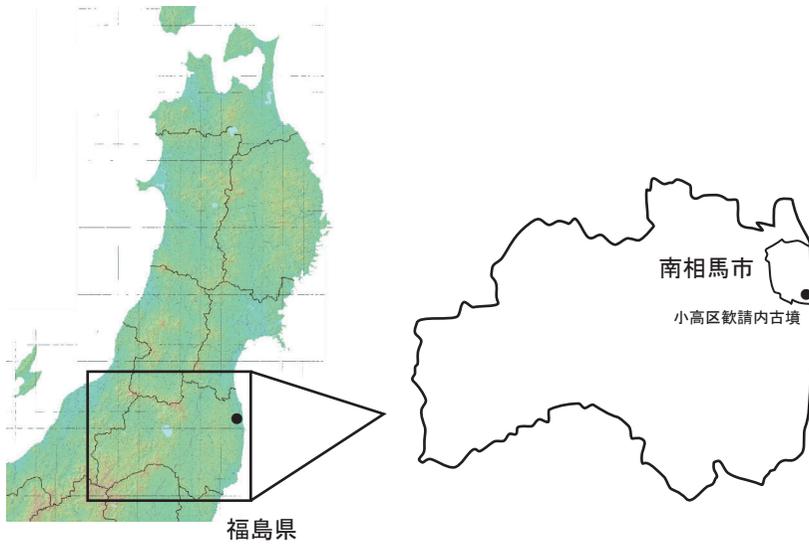
墳丘斜面に堆積した墳丘流出土からは底部穿孔二重口縁壺形土器の破片が多数出土した。赤彩されており、墳頂平坦面の周囲に立て巡らされたものと見られる。第1トレンチでは多数の底部資料が出土しており、墳頂平坦面には数十個体があったと推定される。

##### ・壺棺とその下に割り敷かれてきた土師器壺（写真1・2、第3図）

第3トレンチでは墳丘流出土を切り込んで壺棺が埋納されていることが判明した。墳裾近くに棺の方向を墳丘方向に揃えている様相から見て周辺埋葬と考えられる。周辺埋葬の被葬者は、古墳に埋葬された首長に従属する人物と見られ、幼児が埋葬される例が多い（清家 1999）とされる。本例も壺棺の大きさから幼児の埋葬と推定しておきたい。年代は辻編年のⅢ—3または4（辻 1994、1995）に位置づけられると考えられる。

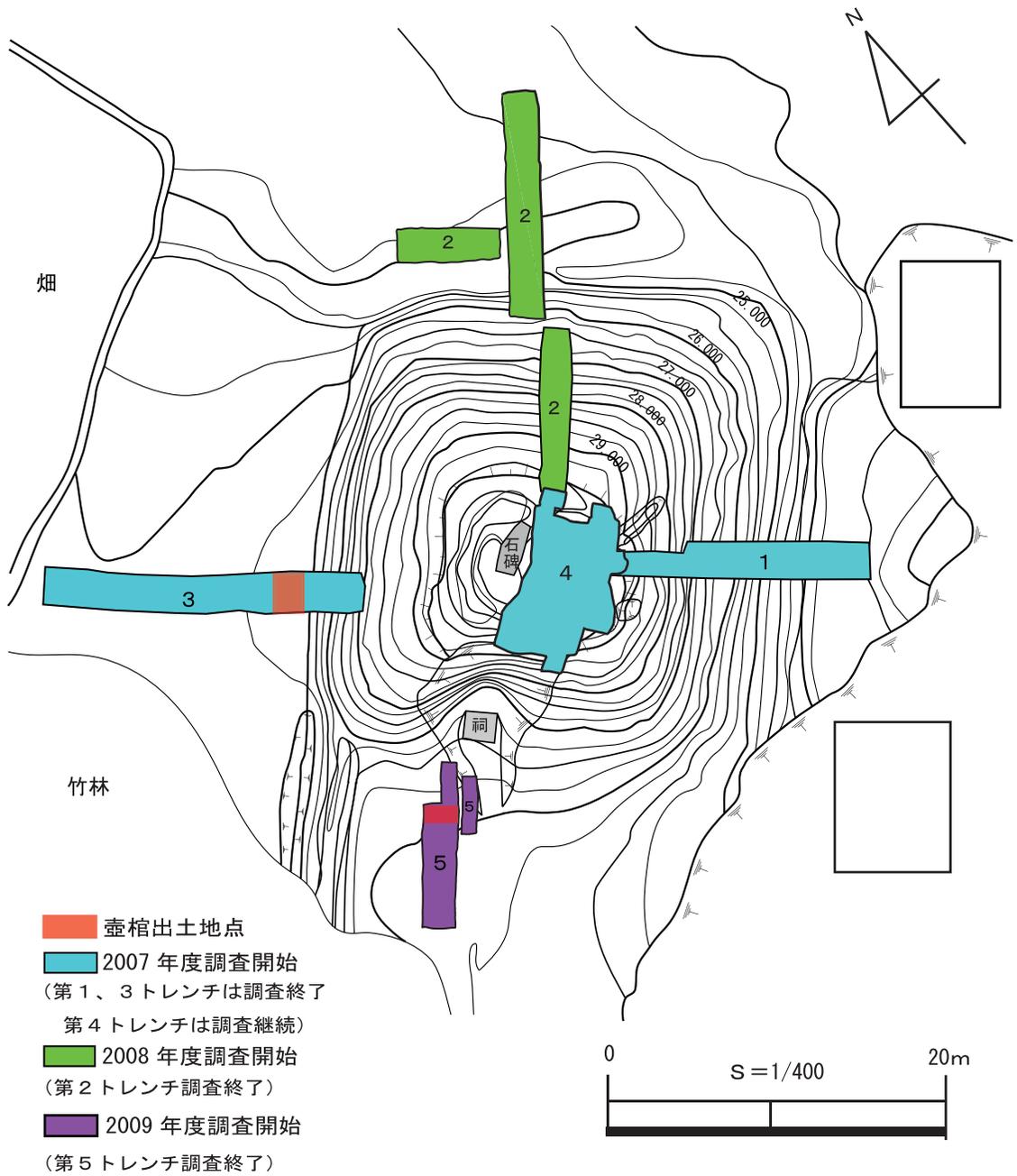
周辺埋葬の例は大和を中心に列島内に広く知られるが、東北地方ではこれまでわずかに本宮町天王壇古墳で確認された埴輪棺（山崎義夫、大河内光夫 1984）があるに過ぎない。歓請内古墳の壺棺はこれに次ぐ発見で、時期的には最古の例と言えるだろう。

さらに壺棺を安定させるためその下には壺2個体が割り敷かれていた。その壺は一方に使用痕跡が認められる。年代は壺棺と同じ辻編年のⅢ—3または4（辻 1994、1995）に位置づけられる。（伊東）



1. 歓請内古墳
  2. 十日林古墳
  3. 杉平古墳群
  4. 飯崎南原古墳群
  5. 手子塚古墳
  6. 荒川前古墳
  7. 一里壇古墳
  8. 方草南原古墳群
  9. 行徳古墳群
  10. 上根沢古墳群
  11. 中村平古墳群
  12. 漆原横穴墓群
  13. 浪岩横穴墓A群
  14. 浪岩横穴墓B群
  15. 北鳩原花輪遺跡
  16. 堤下遺跡
  17. 方原南原遺跡
  18. 荒神前遺跡
  19. 東広畑A遺跡
  20. 西台遺跡
  21. 元屋敷遺跡
  22. 犬塚A遺跡
  23. 玉ノ木平A遺跡
  24. 中村平遺跡
  25. 玉ノ木平C遺跡
  26. 原畑遺跡
- (S=1:50000)

第1図 古墳位置図

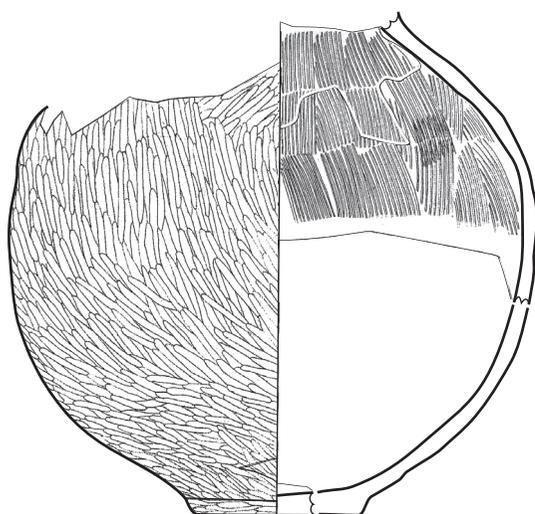


第2図 歓請内古墳測量図、トレンチ配置図



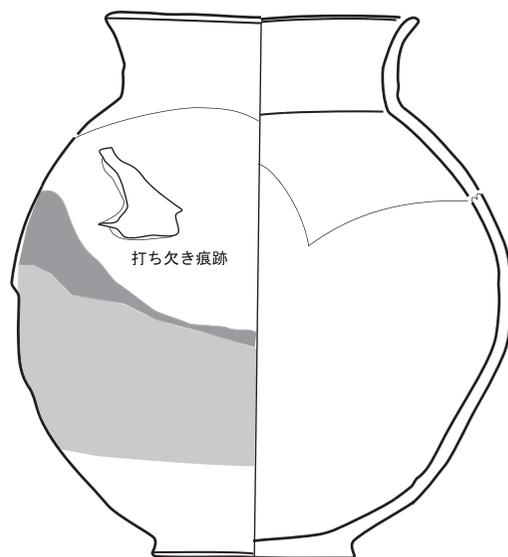
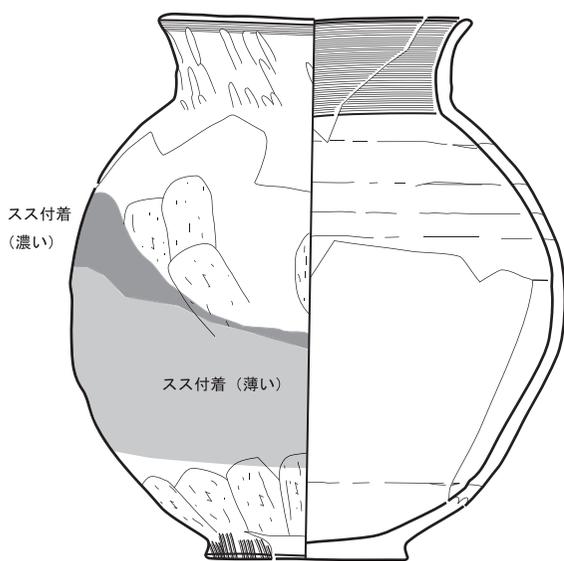
写真1 壺棺の下に割り敷かれていた  
土師器壺

←写真2 壺棺出土状況



No.	種別	層位	外面	内面	口径・ 底径・ 器高 (cm)	残存
①	土師 器壺	墳丘 流出土	ミガキ	ヨコナ デ・ハケ	一・九・ 26	60%
②	土師 器壺	墳丘 流出土	ヨコナデ・ ケズリ・ ミガキ・ 一部ハケ	ヨコナデ	16・ 10.5・ 28.7	60%

第1表 土器観察表



第3図 土師器壺実測図 (上：土師器壺①、下右：土師器壺②表、下左：土師器壺②裏いずれもS=1/4)

## Ⅱ. 第 4、5 次調査の成果

これまで発掘調査の成果を受けて、第 4、5 次調査を実施した。第 4 次調査では第 2、4 トレンチの調査を継続しておこなった。第 5 次調査は第 4 トレンチを継続して調査をおこなった他、新たに墳丘南側の墳丘斜面と周濠の調査のため、第 5 トレンチを設定し調査をおこなった。

### 第 2 トレンチ (第 4 図、写真 3)

第 3 次調査までの第 3 トレンチの周濠の発見と規模の調査結果から、墳丘北側での周濠の存在を確認することを目的とし、調査を行った。

#### 【墳丘構造】

調査区は、古墳の主軸にトレンチ西壁を合わせ、墳丘斜面から北側に 13.6 m、東側から西側にかけて 2 m のトレンチを設定した。ここでは、南側を A 区、北側を B 区とし調査を進めていった。

A 区では墳丘斜面側で堆積土を掘り下げていくことにより、黄色礫混じりの地山面が検出された。地山面では、後世に掘り込まれたと思われる黒色で溝状の掘り込みがみられ、さらに掘り下げたところ北側よりオレンジ色の焼土と思われる土を検出した。また、流出土を掘り下げたところ、地山を削り出して作られた墳丘斜面下部と墳端を確認した。墳端は標高 24.200 m 付近である。B 区では水道管や畑の畝などが検出されたが、周濠の外縁と判断できるような上がりはみられず、墳丘北側に周濠は確認できなかった。

その後、陸橋の存在の可能性を考え、A 区に対し直交するように北側から南側にかけて 2 m、東側から西側にかけて 6 m の C 区を設定し、さらに周濠の探索を行った。表土、流出土と掘り下げを行い、地山面を検出した。東側は粘土質の地山面、西側は礫混じりの地山面であった。周濠は確認できなかった。

以上の調査より、古墳北側には周濠が巡っていないことが明らかとなった。

#### 【出土遺物】

表土からは土師器片が 6 点と不明の土器片が 1 点、また流出土からは二重口縁壺型土器片が 2 点、内黒土器片が 1 点、土師器片が 1 点、縄文土器片が 5 点出土した。

(佐藤泉英、山口)

### 第 4 トレンチ (第 5 図、写真 4)

第 4、5 次調査における主な目的は、墓壙ライン及び陥没坑ラインの確定と、陥没坑の真下にあると予想される棺の直上までの掘り下げである。

#### 【埋葬部の調査】

墓壙ラインについては、第 4 次調査で墓壙のプランを推定し、掘り下げを行ったところ、トレンチ内に茶色の均一の土と、黄色や黒色のブロックが混ざった土との違いが見られたため、墓壙はトレンチ内に収まる形で掘られていると推定された。しかし、土質の違いを追って掘り下げても明瞭な墓壙壁が確認できず、このことから墓壙プランが推定されてい

たものより大きく、トレンチの外にまで広がってめぐっていると新たに推定された。第5次調査では、墓壙プランを追及するため、新たにトレンチの北東と南側に拡張区を設定して掘り下げ、第4次調査で推定された墓壙ラインがどのようにめぐっているかを調査した。その結果、北東拡張部では墓壙ラインの曲がり確認された。また南西部では、土質の違いが見られたが、この土質の違いは、墳丘積み土の質の違いによるもので、本来の墓壙ラインは、トレンチの内部で収束すると理解され、最終的に墓壙ラインが確定できた。墓壙は不整な長方形で、東西の規模は不明である。

陥没坑のプランについては、第4次調査に観察用のあぜを残して陥没坑内を掘り下げた。陥没坑ラインを推定するため、白っぽい硬質の土を追って陥没坑の掘り下げを行っていったが、予想よりも伸びる可能性が出てきた。第5次調査で掘り下げを進め、陥没坑ラインを確定した。同時に、棺の直上を目標に陥没坑の掘り下げを行った結果、陥没坑3・4区の南壁セクションにU字の黒い土がみられ、そこで掘り下げを停止し、土層断面図作成等の記録作業を行い、陥没坑内は土嚢パックで保護した。次回の調査で本格的な棺の調査をおこなう予定である。

#### 【出土遺物】

第4次調査で、陥没坑内埋土から鉄鏃が1点出土した（第6図、写真5）。鏃身部が三角をなす無茎鏃で、鏃身部下部に腸袂をもつ、古墳時代前期にみられるタイプである（註1）。出土した鉄鏃は腸袂の部分が折れ曲がっている。おそらく根挟み部分と思われる痕跡が残っていたが、柄の部分は腐朽しており確認されなかった。福島県内の前期古墳における鉄鏃の副葬は会津若松市の会津大塚山古墳において例が確認されているのみである。今回出土した鉄鏃は会津大塚山古墳の鉄鏃と類似すると思われるが、1点のみの出土であるため、その性格について詳しいことはわからない。今後、棺の内部の調査をおこなっていく過程で明らかになると思われる。

その他、弥生土器片、二重口縁壺型土器片、古墳時代の土師器片、平安時代の土師器片等が出土しているが、古墳に伴うと思われる遺物は少ない。

（伊東、佐久間、佐藤貴裕、楡、山本）

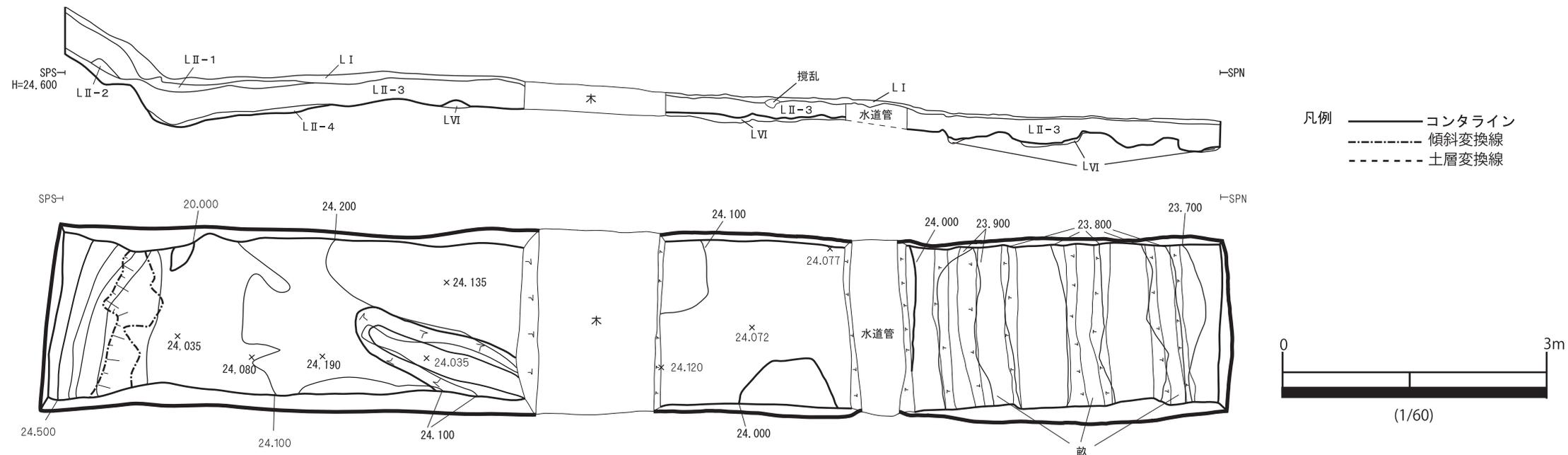
#### 第5 トレンチ（第7図、写真6）

墳丘南側の墳端と周濠の有無を確認することを目的として、第5トレンチを設定した。

#### 【墳丘構造】

墳丘南側の主軸上に祠と参道があることから、トレンチの方向は主軸と合わせたが、祠や参道に配慮し、主軸よりやや東側に配置した。

第1次調査の測量で墳丘南側が祠の造営により大きく削られていることが判明していた。第5トレンチの掘り下げの段階でも墳丘が大きく削られていることが確認されたが、幸いに、墳丘斜面の一部と墳端を確認することができた。墳丘下部の斜面は地山を削り出して作られており、地山面を検出していく過程で、墳丘から続く約10度の緩やかな斜面が、標高25.5mの地点から約30度という急傾斜になっていることが明らかとなった。この急



土層注記

土層	土色	土質	粘性	しまり	備考
LI	7.5YR4/4褐色	砂性シルト	弱	やや弱	土層中に、半径1cmのブロックを約10%含む
LII-1	7.5YR3/3暗褐色	砂性シルト	やや弱	中	なし
LII-2	7.5YR3/3暗褐色	砂性シルト	やや弱	中	なし
LII-3	10YR3/4暗褐色	シルト	中	中	土層中に半径1mmの砂状ブロックを10%ほど含む
LII-4	10YR6/8明黄褐色	シルト	中	中	しまり、粘性がやや弱い。
LVI	7.5YR3/3暗褐色	シルト	中	やや弱	なし

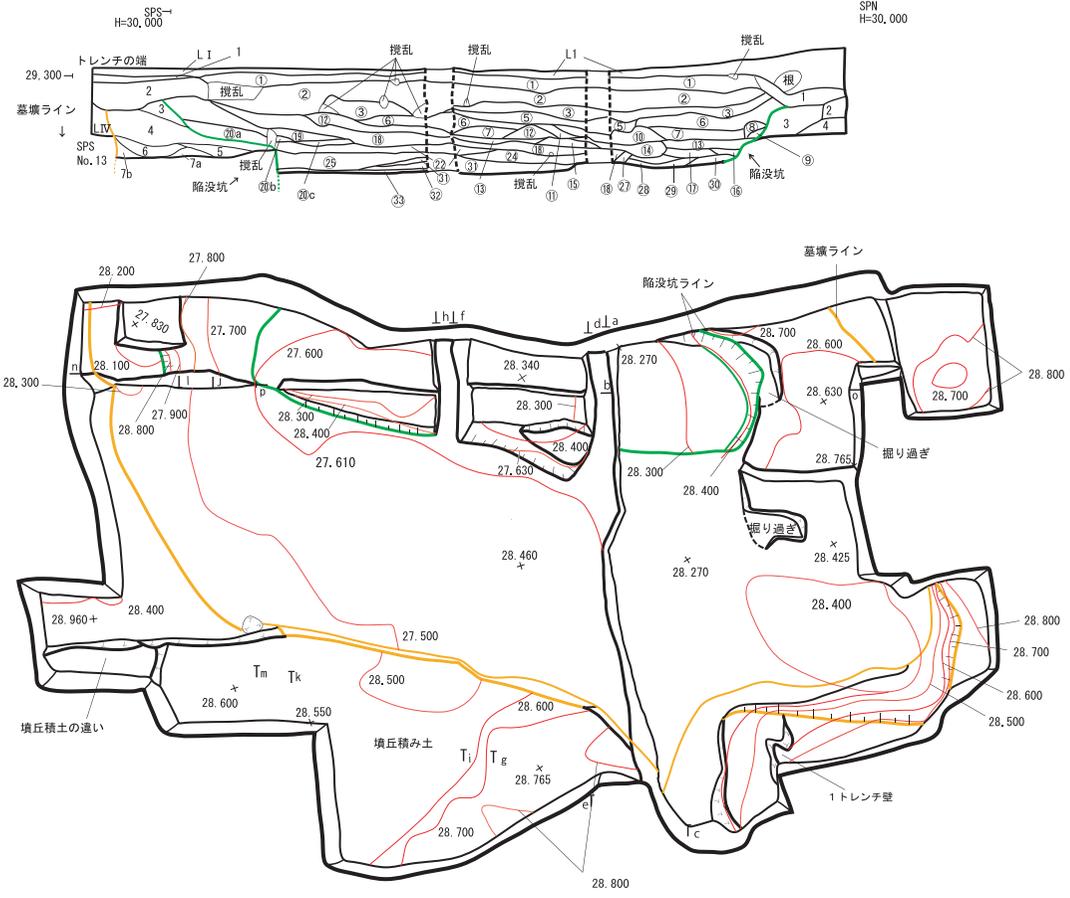
第4図 第2トレンチ平面図・セクション図



写真3 第2トレンチ検出状況写真  
 (右：A、B区全景 北東→南西、中：C区全景 南東→北西、左：A区墳端アップ)

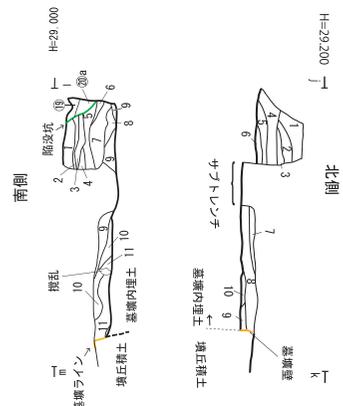


陥没坑縦断セクション図

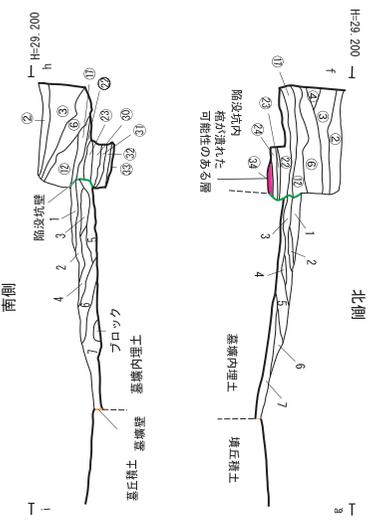


土層	土色	粘性	しまり	シルト	混入物・備考
L1	10YR6/2灰黄褐	砂質シルト	弱	弱	木の根が広がっている
<b>墓壇内埋土</b>					
1	10YR8/2灰白	砂質シルト	中	弱	10YR5/4を7%含む
2	10YR7/6明黄褐	シルト	中	弱	7.5YR2/2と7.5YR6/4を15%含む
3	10YR7/3にぶい黄橙	シルト	強	やや弱	10YR5/6を10%含む
4	7.5YR6/6橙	シルト	中	弱	粘性10YR7/6を5%含む
<b>陥没坑内埋土</b>					
1	10YR4/3暗褐	シルト	中	弱	7.5YR2/2黒褐粘性を含む
2	10YR4/6褐	シルト	やや弱	中	
3	7.5YR4/6褐	シルト	中	中	10YR6/8明黄褐がまだらに混じっている
4	10YR6/6明黄褐	シルト	強	強	10YR8/6黄褐を5%含む
5	7.5YR4/6褐	粘性シルト	中	中	10YR6/8明褐色の土がまだらに混じっている
6	7.5YR4/6褐	シルト	中	中	
7	10YR4/6褐	粘性シルト	中	中	
8	10YR5/8黄褐	粘性シルト	中	中	
9	10YR5/8黄褐	シルト	中	中	7.5YR5/6 明褐が10%混入
10	10YR4/6褐	粘性シルト	中	中	
11	10YR4/6褐	粘性シルト	やや弱	中	
12	7.5YR5/8黄褐	粘性シルト	中	やや強	ブロック状の土が混入
13	10YR6/6明黄褐	シルト	強	やや弱	
14	10YR4/6褐	シルト	やや強	中	
15	7.5YR6/6橙	シルト	やや強	やや弱	10YR4/4褐が7%混入
16	10YR7/6明黄褐	シルト	やや強	中	ブロック状の土が混入
17	10YR4/6褐	シルト	中	中	
19	7.5YR5/6明褐	シルト	やや強	中	10YR黄褐5/8のブロック状の土がみられる
20a	10YR5/4にぶい黄褐	シルト	強	強	10YR7/4にぶい黄橙を5%含む
20b	10YR4/6褐	シルト	中	中	
20c	10YR5/6黄褐	シルト	中	やや強	10YR黄褐の土がまだらにみられる
21	10YR8/6黄橙	シルト	強	強	10YR6/8明黄橙を5%含む
22	10YR4/6褐	シルト	やや強	中	10YR5/8黄褐と10YR暗褐の中を
23	10YR4/6褐	シルト	やや強	中	
24	10YR7/6明黄褐	シルト	強	強	10YR8/4浅黄橙を15%含む
25	7.5YR5/6明褐	シルト	強	中	
26	10YR6/8明黄褐	シルト	やや強	中	
27	10YR6/6明黄褐	シルト	中	中	
28	10YR5/4にぶい黄褐	シルト	やや弱	中	10YR7/4にぶい黄橙を3%含む、ブロック状の土が混入
29	10YR6/8明黄褐	シルト	中	弱	
30	10YR5/6 黄褐	強	強	弱	
31	Hue10YR5/6 黄褐	強	強	弱	
32	Hue10YR4/4 褐	強	強	弱	
33	Hue10YR4/6 褐	強	強	弱	
34	Hue10YR3/3 暗褐	強	強	弱	

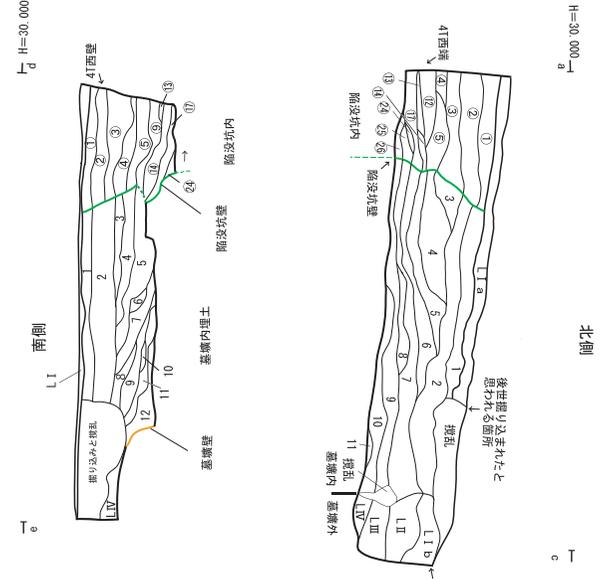
陥没坑縦断セクション図土層注記  
第4トレンチ土層注記(1)



トレンチ横断セクション図3



トレンチ横断セクション図2



トレンチ横断セクション図1

凡例  
赤実線：コンタライン  
緑実線：陥没坑ライン  
黄実線：墓壇ライン  
--- 傾斜変換線  
--- 土層変換線  
※セクション図数字凡例  
○数字：陥没坑内埋土  
数字：墓壇内埋土  
ローマ数字：墳丘積土

第5図 第4トレンチ平面図・セクション図



層	土色	しまり	粘性	シルト	混入物・備考
L I a	10YR 6/2 灰黄褐色	弱	やや弱	強	
L I b	10YR3/3 暗褐	弱	弱	強	
L II	10YR3/4 暗褐	中	中	中	
L III	10YR4/6 褐	強	強	弱	
L IV	10YR5/6 黄褐	強	強	弱	
墓城内埋土					
1	7.5YR 7/8 黄橙色	やや強	強	弱	7.5YR 8/6を10%含む
2	10YR 7/4 にぶい黄橙色	強	やや強	弱	10YR 8/8を15%含む
3	7.5YR 6/6 橙色	強	強	弱	10YR 8/4を20%含む
4	10YR 5/6 黄褐色	強	中	弱	10YR 8/8を15%含む
5	7.5YR 4/4 褐色	やや強	中	中	10YR 6/6を3%含む
6	7.5YR 5/8 明褐色	強	強	弱	10YR 6/8を10%含む
7	10YR 6/4 にぶい黄橙色	強	強	弱	10YR 6/6を10%含む
8	10YR 4/6 褐色	中	やや弱	中	10YR 8/4を30%含む
9	7.5R 4/8 赤	やや弱	弱	強	礫10%と10YR 7/6を10%を含む
10	10YR5/8 黄褐	やや強	強	中	Hue5YR4/8 赤褐れきが25%混入
11	10YR4/6 褐	やや強	強	中	Hue5YR4/8 赤褐れきが50%混入
陥没坑内埋土					
1	10YR 7/4 にぶい黄橙色	中	弱	やや強	
2	10YR 6/6 明黄褐色	中	中	中	10YR 8/4を5%含む
3	10YR 4/6 褐色	強	弱	強	10YR 8/3を3%含む
4	10YR6/6 明黄褐	強	強	中	10YR8/6黄褐を5%含む
5	7.5YR4/6 褐	中	中	弱	10YR6/8明褐色の土がまだらに混じっている
9	10YR5/8 黄褐	中	中	中	7.5YR5/6 明褐が10%混入
13	10YR6/6 明黄褐	強	やや弱	中	
14	10YR4/6 褐	やや強	中	中	
17	10YR4/6 褐	中	中	中	
24	10YR7/6 明黄褐	強	強	中	10YR8/4浅黄橙を15%含む
25	10YR6/4 にぶい黄橙	強	強	中	10YR7/6明黄褐を10%含む
26	10YR3/3 暗褐	強	弱	中	

トレンチ横断セクション図 1北側

L I	10YR 3/4 暗褐	弱	弱	強	
墓城内埋土					
1	10YR 5/6 黄褐	中	弱	中	
2	10YR 4/6 褐	中	弱	中	礫1%含む
3	7.5YR 6/6 橙	中	弱	中	礫1%含む
4	7.5YR 6/8 橙	中	弱	中	7.5YR 4/4を5%含む
5	Hue10YR4/6 褐	やや強	やや強	弱	Hue10YR6/8 明黄褐が30%混入
6	Hue7.5YR4/6 褐	やや強	強	弱	Hue10YR5/6 黄褐が5%混入
7	Hue10YR4/6 褐	やや強	強	弱	Hue2.5Y5/6 黄褐とHue5YR4/8赤れきが15%混入
8	Hue10YR4/6 褐	やや強	やや強	弱	Hue10YR6/8 明黄褐が10%混入
9	Hue7.5YR4/6 褐	やや強	強	弱	Hue10YR5/6 黄褐とHue7.5YR4/6褐が40%混入
10	Hue10YR3/4 暗褐	やや強	やや強	弱	Hue10YR6/8 明黄褐が5%混入
11	Hue7.5YR3/4 暗褐	やや強	やや強	弱	Hue10YR6/8 明黄褐が15%混入
12	Hue10YR4/6 褐	やや強	強	中	Hue5YR4/8 赤褐れきが30%混入

トレンチ横断セクション図 1南側

第4 トレンチ土層注記 (2)

層	土色	しまり	粘性	シルト	混入物・備考
陥没坑内埋土					
1	10YR 7/3 にぶい黄褐	中	弱	中	
2	10YR 7/6 明黄褐	中	やや弱	中	10YR 4/4を10%含む
3	10YR 8/6 黄橙	中	中	中	10YR 6/4を3%含む
4	7.5YR 4/3 褐	弱	やや弱	中	7.5YR 7/6を5%含む
5	10YR 6/6 明黄褐	やや強	中	中	10YR 5/3を3%含む
9	10YR5/8黄褐	中	中	中	7.5YR5/6 明褐が10%混入
13	10YR6/6明黄褐	強	やや弱	中	
14	10YR4/6褐	やや強	中	中	
17	10YR4/6褐	中	中	中	
24	10YR7/6明黄褐	強	強	中	10YR8/4浅黄橙を15%含む

トレンチ横断セクション図 1南側

層	土色	しまり	粘性	シルト	混入物・備考
墓壙内埋土					
1	Hue10YR6/6 明黄褐	強	強	弱	黄色っぽい土が混じっている (Hue2.5Y7/4)
2	Hue10YR5/6 黄褐	強	強	弱	なし
3	Hue10YR3/4 暗褐	強	強	弱	黄色っぽい土が混じっている (Hue2.5Y7/4)
4	Hue2.5Y7/4 浅黄	強	強	弱	
5	Hue10YR5/6 黄褐	強	強	弱	
6	Hue10YR3/3 暗褐	強	強	弱	
7	Hue10YR4/6 褐	強	強	弱	

トレンチ横断セクション図 3北側

層	土色	しまり	粘性	シルト	混入物・備考
墓壙内埋土					
1	Hue10YR6/6 明黄褐	強	強	弱	黄色っぽい土が混じっている (Hue2.5Y7/4)
2	Hue10YR5/6 黄褐	強	強	弱	なし
3	Hue10YR3/4 暗褐	強	強	弱	黄色っぽい土が混じっている (Hue2.5Y7/4)
4	Hue2.5Y7/4 浅黄	強	強	弱	
5	Hue10YR5/6 黄褐	強	強	弱	
6	Hue10YR3/3 暗褐	強	強	弱	
7	Hue10YR4/6 褐	強	強	弱	

トレンチ横断セクション図 3南側

層	土色	しまり	粘性	シルト	混入物・備考
墓壙内埋土					
7	Hue10YR6/8 明黄褐	やや強	強	粘質シルト	
8	Hue10YR5/6 黄褐	やや強	中	粘質シルト	Hue10YR3/4 暗褐とHue7.5YR6/6 が、各10%混入
9	Hue10YR6/6 明黄褐	強	中	シルト	
10	Hue10YR3/4 暗褐	中	強	砂質シルト	

トレンチ横断セクション図 2北側

第4 トレンチ土層注記 (3)

層	土色	しまり	粘性	シルト	混入物・備考
陥没坑内埋土					
1	Hue10YR5/4 褐	やや強	中	シルト	
2	Hue2.5Y6/6 明黄褐	やや強	中	砂質シルト	Hue5YR6/8微量混入
3	Hue10YR4/3 にぶい黄褐	中	強	シルト	
4	Hue2.5Y6/6 明黄褐	強	強	シルト	
5	Hue10YR6/6 明黄褐	強	強	シルト	
6	Hue2.5Y6/6 明黄褐	強	強	粘質シルト	

トレンチ横断セクション図 2北側

層	土色	しまり	粘性	シルト	混入物・備考
陥没坑内埋土					
19	7.5YR5/6明褐	シルト	やや強	中	10YR黄褐5/8のブロック状の土がみられる
20a	10YR5/4にぶい黄褐	シルト	強	強	10YR7/4にぶい黄橙を5%含む
墓壇内埋土					
1	Hue7.5YR4/6 褐	やや強	弱	中	Hue10YR5/8 黄褐が10%ほど混入
2	Hue10YR4/6 褐	強	中	中	
3	Hue10YR5/8 黄褐	やや強	中	中	Hue10YR5/8 黄褐が40%ほど混入
4	Hue10YR4/6 褐	やや強	弱	中	Hue7.5YR4/4 褐が30%ほど混入
5	Hue7.5YR4/4 褐	やや強	中	中	Hue10YR4/6 褐が40%ほど混入
6	Hue7.5YR5/6 明褐	強	中	中	Hue10YR5/8 黄褐が混入
7	Hue7.5YR4/4 褐	強	中	中	Hue10YR5/8 黄褐が混入
8	Hue10YR5/8 黄褐	やや強	中	中	Hue7.5YR3/4 暗褐が10%混入
9	Hue7.5YR3/4 暗褐	強	中	中	Hue10YR5/8 黄褐が混入
10	Hue10YR5/8 黄褐	やや強	中	中	Hue10YR5/8 黄褐が5%混入
11	Hue10YR4/6 褐	やや強	強	弱	Hue2.5Y6/8 明黄褐が10%混入
12	Hue7.5YR4/6 褐	やや強	中	中	

トレンチ横断セクション図 2南側

#### 第4トレンチ土層注記（4）



写真4 第4トレンチ検出状況写真

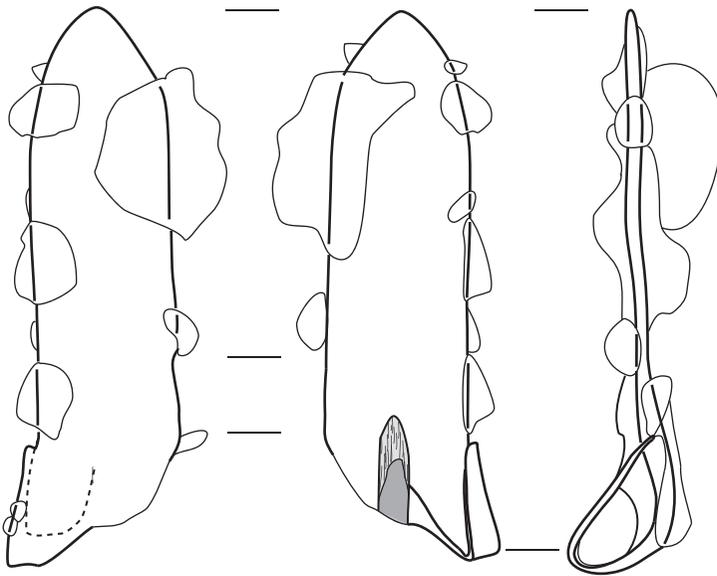


表

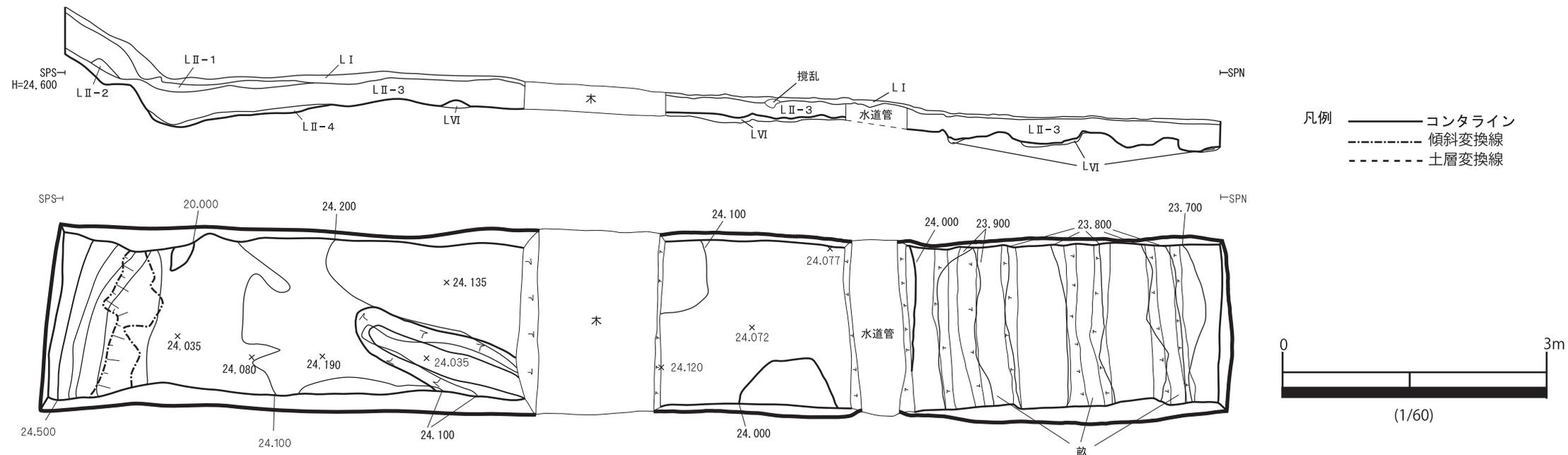
裏

反り返った腸袂部

写真5 第4トレンチ出土鉄族



第6図 鉄族実測図（実寸大）



土層注記

土層	土色	土質	粘性	しまり	備考
LI	7.5YR4/4褐色	砂性シルト	弱	やや弱	土層中に、半径1cmのブロックを約10%含む
LII-1	7.5YR3/3暗褐色	砂性シルト	やや弱	中	なし
LII-2	7.5YR3/3暗褐色	砂性シルト	やや弱	中	なし
LII-3	10YR3/4暗褐色	シルト	中	中	土層中に半径1mmの砂状ブロックを10%ほど含む
LII-4	10YR6/8明黄褐色	シルト	中	中	しまり、粘性がやや弱い。
LVI	7.5YR3/3暗褐色	シルト	中	やや弱	なし

第4図 第2トレンチ平面図・セクション図



写真3 第2トレンチ検出状況写真  
 (右：A、B区全景 北東→南西、中：C区全景 南東→北西、左：A区墳端アップ)



斜面が墳丘下部であると判断した。さらに急斜面は、標高 25.2m の地点からほぼ平坦な面へと変わり、その面が続いていく。このことから、標高 25.2m の地点の傾斜変換線が墳端であると考えられる。墳端より南側に続くほぼ平坦な面は、その後、南に行くにつれて緩やかに上がっていくものの、明確な立ち上がりを確認することはできず、このことから墳丘南側には周濠が巡っていないと考えられる。

### 【出土遺物】

第5トレンチからは多数の遺物が出土した。流出土中から、二重口縁壺形土器片が237点、底部穿孔壺形土器片と思われるものが5点、その他の土師器片が220点(うち平安時代のもものが79点)、内黒土器片が34点、縄文土器片が6点、弥生土器片が4点、不明な土器片が18点、坏の破片が2点、石器が4点、古銭が1点である。

これらの遺物に加え、地山を掘り込んで据えられた平安時代のもと思われる土器や墳丘流出土を掘り込んで据えられた壺棺が出土している。

#### <壺棺> (写真6、第8図)

第5トレンチで墳丘面確認のため、流出土を掘り下げていく過程で、複合口縁の壺を検出した。確認された墳端より南に約0.5mの地点にあたる。周囲を精査したところ、流出土を切り込んで浅い据え方を掘り、その内部に意識的に横倒しに据えられていた。西側をむいた口縁部には意図的に割られた別の土器片が蓋状にかぶせられていた。保存状態が悪く、剥離していたため多くが破片として取り上げることになった。この壺は、流出土を切り込んで埋納されている点や壺の大きさなど第3トレンチで発見された壺棺と共通点が多いことから壺棺であると考えられる。今回出土した壺棺はやや小型であるが、以前出土した壺棺と同じ周辺埋葬の性格をもつものと考えられる。

周辺埋葬の被葬者は、古墳に埋葬された首長に従属する人物とみられ、全国的に幼児を埋葬する例が多い。今回の例も壺棺の大きさから幼児の埋葬であると推定される。東北地方における周辺埋葬は例が少ない。(阿部、佐竹、鈴木、成瀬、遊佐)

## Ⅲ. まとめ

第4, 5次調査では、墳丘外周部の状況を明らかにすることと、第2, 3次調査に引き続いて墳頂部の様相を明らかにすることを目的に調査を実施した。

墳丘の外周部の北側に設定した第2トレンチの拡張部、南側の第5トレンチのいずれも周濠は確認できなかった。北側の第2トレンチでは陸橋部分にあっている可能性も考え古墳主軸と直交する方向に拡張も試みたが周濠と見ることができない落ち込みは存在しなかった。南側の第5トレンチでも調査可能な範囲で追究したが、立ち上がりを確認することはできなかった。

第3次調査で周濠と認識した部分は、墳丘側は3カ所の平坦面を持ちながら急角度で落ち込むのに対して外周にあたる西側はごくゆるやかな傾斜で徐々に立ち上がっていく形状

である（辻他 2009）。この形は墳丘側、が外周側ともに急傾斜で立ち上がる一般的な周濠の掘り込みの形とは異なっている。第4次、5次調査成果を合わせ考えれば、第3トレンチで周濠と考えた掘り込みは、墳丘下段を地山削りだして形成するための地業と理解すべきであろう。

従って本古墳では墳丘下段を地山削りだして形成されており、周濠を意識的に形成することはなかったと考えられる。前期の古墳としては一般的な構造と理解されよう。

墳頂部はこれまでに引き続いて墓壙の確認を続行するとともに陥没坑の掘り下げを実施した。

墓壙の平面形は東側のラインは、第3次調査までと変わらないが、南、北側については墓壙内埋土を若干掘り下げたところ壁を検出できず、さらにトレンチを拡張し追究した。追究の結果、第5図に示した南側と北側のラインを確定できた。墳頂に石碑があるため、墓壙の全体の姿は確認できないが、検出できた範囲で見れば、墓壙は不整な長方形で長軸にあたる南北は約8m前後である。当初の想定よりはかなり大型で、墳頂平坦面のほぼいっぱいにあたる。

墓壙の東側ラインには緩やかなあがり突出部分があり、墓壙壁の傾きも緩やかで、これまで東北地方で確認されてきた宮城県大塚森古墳などの掘り込みによる墓壙とは様相が違っている。今後さらに様相を確認する必要があるが、墓壙として予定している部分を空間にして周囲にだけ土を積み上げて結果として墓壙とするいわゆる構築墓壙である可能性が高いと考えられる。

墓壙のほぼ中央にはほぼ墓壙と方向を同じくする陥没坑が確認されており、今回の調査でも若干の掘り下げを行った。これまでのところ陥没坑内からは鉄鏝が1点出土している。第5次調査ではこれまで掘り下げた上層部分の断面図を作成し、写真撮影の後に土層断面を除去した。

第5次までの調査で古墳の規模、形状、墳丘構造、墳丘外の様相などについてほぼ基本的な情報を確認することができた。今後予定している第6次調査では埋葬部の調査を慎重に実施していく予定である。（辻 秀人）

## 謝辞

調査にあたり、土地を所有する飯崎地区水谷堯宣氏、松本登氏、富沢けい子氏にご支援、ご協力をいただきました。また、南相馬市教育委員会には全面的にご支援をいただきました。荒淑人、麻美ご夫妻には宿舎をご提供頂きました。末文ではありますが心より感謝申し上げます。

今年度で退官される平田隆一先生、守屋嘉美先生、香坂昌紀先生には、辻が本学に赴任してから18年間にわたり、学生諸君共々大変お世話になりました。また、香坂先生が学科長をお務めの時代には公私ともにご指導、ご支援いただきました。心から御礼申し上げますとともに3先生のご健康と今後のご活躍を心からお祈り申し上げます。

## 註

註1 鉄鍬の年代等についての記載は川畑 2009 を参考とした。

## 引用・参考文献（年代順）

- 山崎義夫、大河内光夫 1984『天王壇古墳』本宮町文化財調査報告書第八集
- 須賀井新人 植松暁彦 黒坂広美 1994『今塚遺跡発掘調査報告書』財団法人 山形県埋蔵文化財センター
- 辻秀人 1994「東北南部における古墳出現期の土器編年－その1 会津盆地－」『東北学院大学論集 歴史学・地理学 史学科創立30周年記念 第26号』pp. 105～140 東北学院大学学術研究会
- 辻秀人 1995「東北南部における古墳出現期の土器編年－その2－」『東北学院大学論集 歴史学・地理学 第27号』pp. 39～88 東北学院大学学術研究会
- 清家章 1999「古墳時代周辺埋葬考」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集
- 辻秀人他 2008「南相馬市小高区歓請内古墳第一次調査の概要」『福島考古』第49号
- 辻秀人他 2009「南相馬市小高区歓請内古墳第2、3次調査の概要」『東北学院大学論集 歴史と文化』第44号
- 川畑 純 2009「前・中期古墳副葬鍬の変遷とその意義」『史林 第92巻 第2号』pp.1～39 京都大学大学院文学研究科内史学研究会

## 調査体制

- 第4次調査** 2009年3月2日～3月21日
- 調査主体** 東北学院大学文学部歴史学科辻ゼミナール
- 調査担当者** 辻 秀人（東北学院大学文学部教授）
- 調査員** 伊東静香（大学院生）  
小関修太郎・佐藤勇太・畑中 光・中山知香・廣長 俊・幕田奈々（4年生）  
大山真実・小野寺千晶・菊池友紀・佐伯奈弓・高橋直樹・山田真莉（3年生）  
阿部良祐・佐久間美里・佐竹 崇・佐藤貴裕・佐藤泉英・鈴木麻衣・楡 望美・  
山口貴晃・山本秀美・遊佐恵太（2年生）
- 調査協力** 南相馬市教育委員会  
飯崎行政区・水谷堯宣・水谷芳宣・松本 登・富沢六郎・川田 強・佐川 久・  
林 紘太郎・荒 淑人・大谷 基・三瓶秀文・百々千鶴・遠藤美貴子（敬称略）
- 第5次調査** 2009年8月3日～8月25日
- 調査主体** 東北学院大学文学部歴史学科辻ゼミナール
- 調査担当者** 辻 秀人（東北学院大学文学部教授）
- 調査員** 伊東静香（大学院生）  
大山真実・菊池友紀・高橋直樹・山田真莉（4年生）  
阿部良祐・佐久間美里・佐竹 崇・佐藤貴裕・佐藤泉英・鈴木麻衣・成瀬裕也・  
楡 望美・山口貴晃・山本秀美・遊佐恵太（3年生）
- 調査参加者** 熱海泰輔・大沼友樹・熊谷紀幸・佐々木織衣・佐々木由貴奈・杉原桃子・田中夕貴・  
新沼祐伸（2年生）  
阿部 碧・伊藤慶華・海老田里咲・小田 恵・鹿野恵美・貴田麻美・佐々木拓哉・  
成田 優・服部芳冶・松本尚也・森田彩加・横田竜巳・吉田龍司（1年生）
- 調査協力** 南相馬市教育委員会  
飯崎行政区・水谷堯宣・水谷芳宣・松本 登・富沢六郎・川田 強・佐川 久・  
林紘太郎・荒 淑人・大谷 基・佐藤良和・佐藤勇太・幕田奈々（敬称略）
- 整理作業参加者** 伊東静香（大学院生）  
大山真実・小野寺千晶・菊池友紀・佐伯奈弓・高橋直樹・山田真莉（4年生）  
阿部良祐・佐久間美里・佐竹 崇・佐藤貴裕・佐藤泉英・鈴木麻衣・成瀬裕也・  
楡 望美・山口貴晃・山本秀美・遊佐恵太（3年生）